

平和ってなに？

～戦争を知って平和を考えよう～

令和6年度版





7月12日は「宇都宮市平和の日」
7月12日～8月15日は「宇都宮市平和月間」です

宇都宮市では、宇都宮空襲があった7月12日を「宇都宮市平和の日」、7月12日から終戦の日の8月15日までを「宇都宮市平和月間」と定め、戦争の悲惨さや平和の大切さを伝えています。この期間中、宇都宮市立図書館では、平和関連の本などを集めたコーナーを開設しています。あわせて、平和を考えるための図書のリストを作成しました。どうぞご利用ください。

戦時中の栃木県や宇都宮市についての本


	タイトル	うつのみやの空襲			宇都宮市の「戦災記録保存事業」の報告書。近代の宇都宮の歴史から、戦後の平和への道のりまでを、多数の写真や資料、市民への聞き取り調査などでわかりやすく記録している。
	著者	宇都宮市教育委員会/編			
	出版社	宇都宮市教育委員会			
	分類	K210.7/ウ	出版年	2001年 2011年	
	所蔵館	全館			
No Image	タイトル	宇都宮空襲の記憶			昭和20年7月12日に起きた宇都宮大空襲当日の記憶を中心に、市民が自身の戦争体験をつづった記録集。当時の宇都宮市で起きた、九つの貴重な体験を収録している。
	著者	宇都宮市平和委員会/編			
	出版社	宇都宮市平和委員会/編			
	分類	K390/ウ	出版年	2005年	
	所蔵館	中央・東・南			
	タイトル	二荒山は炎の中に			宇都宮空襲・戦災の実態を、多くの図版や写真、絵を使い、わかりやすく解説。市民による宇都宮空襲の切実な体験談を交え、身近なところから平和を考える1冊
	著者	宇都宮平和祈念館建設準備会/編			
	出版社	随想舎			
	分類	K390/ウ	出版年	1992年	
	所蔵館	中央・東・南・河内			
	タイトル	実録!宇都宮大空襲			当時市役所に勤務していた郷土史家の徳田浩淳氏が、宇都宮大空襲のあった7月12日から19日までの一週間を、自身と家族の体験を中心に克明に記録している。
	著者	徳田浩淳/著			
	出版社	宇都宮平和祈念館をつくる会			
	分類	K390/ト	出版年	1999年	
	所蔵館	中央・南			
	タイトル	語りつぐ戦争 とちぎ戦後70年			下野新聞が戦後70年を節目に企画した連載記事をまとめたもの。栃木県内外の戦争体験者による証言や、惨禍を語り継ぐ各地の取り組みを多数収録。記憶や歴史が遠ざかりつつあるなか「いま語らねば、伝えねば」という切迫した思いが伝わってくる。
	著者	下野新聞社編集局/著			
	出版社	下野新聞社			
	分類	K200.7/シ	出版年	2016年	
	所蔵館	全館			


	タイトル	戦争が終わった日 栃木県民が語る八月十五日			昭和20年8月15日終戦の日の栃木県民の体験談。空襲・食糧難・学童疎開・勤労動員そして、肉親・友人の出征・戦死など、戦争が遠く離れた時代や地域のものではないこと、平和の大切さを知る。
	著者	編集工房随想舎/編			
	出版社	随想舎			
	分類	K200.7/ズ	出版年	1989年	
	所蔵館	中央・東・南・河内			


	タイトル	一しずくの水 一栃木県被爆者体験記一			県総合運動公園内に「栃木県原爆死没者慰霊の碑」が建立されたのを機に、核兵器廃絶と世界平和を訴えるため発行された、栃木県関係者だけの被爆体験記。栃木県民も原爆とは無縁ではないことを改めて考えさせられる。
	著者	栃木県原爆被害者協議会/編			
	出版社	栃木県原爆被害者協議会			
	分類	K950/ト	出版年	1992年	
	所蔵館	全館			

	タイトル	戦争の記憶を語り継ぐ (DVD)			宇都宮空襲、シベリア抑留、インパール作戦などを体験した栃木県内在住者たちの証言を集めた2枚組DVD。当時の心理状態や悲惨な生活について細部まで語られており、ひとつひとつの言葉の重みに胸が締め付けられる。
	著者	栃木県/編			
	出版社	栃木県			
	分類	270/セ	出版年	2016年	
	所蔵館	中央・南・上河内・河内			

次代へ読み継がれていく本

	タイトル	黒い雨			原爆の激しさ、恐ろしさを声高に表現する作品が多い中、この作品は被爆者の日常をただ淡々と描いている。市井の人の上に冷たく降り注ぐ黒い雨。静かな光景が原爆の残酷さを際立たせ、平和の大切さを強く訴えている。(野間文芸賞受賞) ※埼玉福祉会発行の大活字本あり
	著者	井伏 鱒二/著			
	出版社	新潮社 (文庫)			
	分類	F/イブセ.マ	出版年	2003年	
	所蔵館	全館			

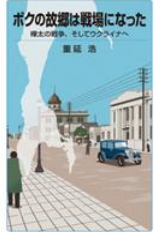
	タイトル	アンネの日記			第二次世界大戦下、ユダヤ人ゆえに隠れ家での生活をしいられるアンネ。13歳から約2年間にわたりつづられた日記では、辛くても、いつかまた幸福を見いだせると信じ、未来に希望を抱くことで自分を保つアンネの健気さや強さにふれられる。(ユネスコ記憶遺産)
	著者	アンネ・フランク/著 深町 眞理子/訳			
	出版社	文藝春秋			
	分類	945/フ	出版年	2003年	
	所蔵館	全館			


	タイトル	夜と霧			第二次世界大戦中、心理学者・精神学者だった著者は、ナチスにより強制収容所に収容された。強制労働、懲罰、「選抜」。過酷な現実にある被収容者の心の反応を冷静に分析。「わたしたちは、おそらくこれまでの時代の間も知らなかった「人間」を知った。」と記している。
	著者	ヴィクトール・E・フランク/著 池田 香代子/訳			
	出版社	みすず書房			
	分類	946/フ	出版年	2002年	
	所蔵館	全館			

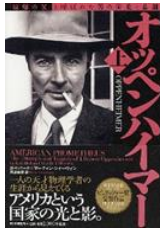
戦争を知り、平和を願う本





	タイトル	14歳のヒロシマ			14歳のときに広島で被爆した著者の体験記。孫からの勧めにより70歳を過ぎてから被爆体験証言者としての活動を始め、のべ22万人以上に語り続けてきた。一生語りたくなかった記憶と向き合い紡ぎ出された著者の言葉には、平和への願いが込められていて、戦争を知らない私たちの心にも深く響く。
	著者	梶本 淑子/著			
	出版社	河出書房新社			
	分類	210.7/カ	出版年	2023年	
	所蔵館	中央・南			


	タイトル	ボクの故郷は戦場になった			「戦場だけが、戦争ではない」無条件降伏後も樺太はソ連軍に独占されていた。樺太の人々は、占領された故郷でどのように生活し、ソ連軍とどのような関係を築いてきたのか。自身の体験を踏まえて振り返る。
	著者	重延 浩/著			
	出版社	岩波書店			
	分類	YA210.7/シ	出版年	2023年	
	所蔵館	中央			


	タイトル	ずっと、ずっと帰りを待っていました 「沖縄戦」指揮官と遺族の往復書簡			終戦直後から部下の遺族に「詫び状」を送り続けた沖縄戦の指揮官、伊東孝一。終戦から70年余りが過ぎ、伊東から「遺族からの返信」の束を託されたジャーナリストの夫婦が、遺族へ手紙を返還するなかで知った伊東と遺族たちの思いを綴る。
	著者	浜田 哲二・浜田 律子/著			
	出版社	新潮社			
	分類	219/ハ	出版年	2024年	
	所蔵館	東			

	タイトル	オッペンハイマー 「原爆の父」と呼ばれた男の栄光と悲劇」上・下			2006年ピューリッツァー賞受賞作品。2023年の映画「オッペンハイマー」の上映により知る人の増えた「原爆の父」と呼ばれる天才物理学者J.ロバート・オッペンハイマー。彼の生涯を丹念に追い、丁寧に描かれている。
	著者	カイ・バード/著 マーティン・シャーウィン/著 河邊俊彦/訳			
	出版社	PHP研究所			
	分類	289.5/オツペ	出版年	2007年	
	所蔵館	中央・東			


	タイトル	戦争はいかに終結したか			戦争終結形態として「紛争原因の根本的解決」と「妥協的和平」の視点で、20世紀以降の主要な戦争の終結過程を分析し、戦争はいかに收拾すべきかを論じている。
	著者	千々和泰明/著			
	出版社	中央公論新社			
	分類	319/チ	出版年	2021	
	所蔵館	中央・南			


	タイトル	ズラータ、16歳の日記			小説・マンガがきっかけで日本語の勉強を始めたウクライナ出身の女子高生ズラータ。2022年2月、学校で先生から「明日から戦争になります」と告げられた。命がけの逃避行で日本を目指した彼女の心をリアルに記録した一冊
	著者	ズラータ・イヴァシコワ/文・絵			
	出版社	世界文化社			
	分類	YA369.322/イ	出版年	2022年	
	所蔵館	中央・東・南			


	タイトル	僕の仕事は、世界を平和にすること。			NGO団体のピースボートやICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)で活動する著者が、自身の経験や、世界を平和にするために大切な13の事について具体的かつ丁寧に語っている。
	著者	川崎 哲/著			
	出版社	旬報社			
	分類	319.8/カ	出版年	2022年	
	所蔵館	南			


	タイトル	甦る戦災樹木 カラー版			戦争の惨禍をその姿で伝え続ける全国の戦災樹木を紹介。宇都宮の復興のシンボルである旭町の大イチョウも戦災樹木のひとつである。物言わぬ存在だが、時間が流れ、戦争を経験した人が少なくなっている現在、戦争が何を残したかを雄弁に語ってくれる。
	著者	菅野 博貢/著			
	出版社	さくら舎			
	分類	653/カ	出版年	2023年	
	所蔵館	中央			

	タイトル	ラジオと戦争			当時、日本国民はラジオによって情報を得ていた。しかし、放送原稿は同盟記事から削除され、書き換えられたものだった。報道に関わる人間は戦争に対してどのように向き合ってきたのか。現代にも通じる課題を投げかけてくる。
	著者	大森 淳郎・NHK放送文化研究所/著			
	出版社	NHK出版			
	分類	699.2/オ	出版年	2023年	
	所蔵館	中央			

	タイトル	ぼくらの戦争なんだぜ			戦争を知らない私たちが”思い出”としての戦争を、文学を通じて学ぶ。戦争について知るといことは、すなわち私たちの過去について知るといこと。「知らない」ことは怖い。ため、「ことば」を介して先人たちの記憶をたどっていく。
	著者	高橋 源一郎/著			
	出版社	朝日新聞出版			
	分類	910.26/タ	出版年	2022	
	所蔵館	中央・東・南			

	タイトル	清六の戦争 ある従軍記者の軌跡			マニラでの戦いのなか、爆撃下の洞窟で兵士達のために新聞を作っている記者達がいた。主に取材を担当していた著者の曾祖叔父である伊藤清六は、どんな思いで新聞を作っていたのか。清六の人生の歩みとともに戦時中の記者の在り方についても分かる1冊
	著者	伊藤 絵理子/著			
	出版社	毎日新聞出版			
	分類	916/イ	出版年	2021年	
	所蔵館	中央・東			

	タイトル	女も戦争を担った ~昭和の証言~			召集令状が来て逃げた息子を密告した母や自分史を石碑に刻んだ老女など、戦時下では「被害者」として語られることが多い女性たちが、戦争とどうかかわったのか。昭和の戦争を生きぬいた女性たちを訪ね歩き書かれた1冊が、出版から40年を経て令和の世に復刊
	著者	川名 紀美/著			
	出版社	河出書房新社			
	分類	916/カ	出版年	2023年	
	所蔵館	中央・東・南			

	タイトル	傷魂ー忘れられない従軍の体験			兵隊たちは戦地でどんな生活をしていたのか。戦後1周年に出版された体験談の再刊。昭和19年に従軍し、比島(フィリピン)に向かった著者の、不衛生で不健康、常に命の危機にさらされ続けた苦しい日々が生々しく記録されている。
	著者	宮澤 縦一/著			
	出版社	富士房インターナショナル			
	分類	916/ミ	出版年	2020	
	所蔵館	中央			

発行 令和6年7月 編集・発行 宇都宮市立図書館

問合せ 宇都宮市立中央図書館 〒320-0845 宇都宮市明保野町7-57 電話 028-636-0231